

流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和七年二月句会(第一五三回)

兼題 「除夜の鐘」

催日 令和七年二月二十二日

開催場所 生涯学習センター

出席者 七名

投句者・選句者 七名

(二点句)

マイホーム描く夫婦や草青む 寿歩
雪は遊具さあ何をして遊ぶかな 艸寛
春立ちぬ推し作家あり小半日 小牧
三椽やつぼみはちきれほのてらす 寿歩

(一点句)

知らぬ間に更地となりて草青む 玄鳥
解体を終えたる更地草青む 夢心
草青み石を枕の昼寝かな 艸寛
ほんのりと背中に感じる春陽ざし 互酬
春の文心に刻み六十年 艸寛
風音に鼻唄まじる春の宵 玄鳥
喜寿過ぎて足を捕られし草青む 艸寛

(四点句)

●砂塵立て富士を隠しぬ春疾風 夢心

選評：富士山と言ったら冠雪の美しさであり、夕日を背にした影絵のような富士を誰しもが思い描くに違いありません。

しかしこの句はその富士山を砂塵で覆い隠してしまう。最初に「砂塵立て」と詠んでスタートしたこの句は「疾風」の激しく吹きおこる風で納めている大胆でスケールの大きな句であると思えます。
(互酬記)

●草青む早緑(さみどり) 世界すぐそこに 徹心

選評：冬枯れの中から、いつの間にか春の気配が動き出し草が萌え始める。待ちかねた春の気配である。ここまでくれば次は草や木の芽が芽生え、続いて若草や若葉の緑が映える春はもうすぐそこにやってくる。早緑世界という言葉に託して本格的な春の到来を待ち望む気持ちが表れている。草青むという春の兆しから、早緑句う春を待望する様子が読み取れて良い句である
尚、この句の表記に早緑(さみどり)とあるが、ルビは不要だと思ふ。難解な漢字にはルビがあってもよいと思ふが、多用すべきものではないと思ふ。
(夢心記)

(三点句)

能登半島隆起の丘に草青む 互酬
時刻表めぐる旅路に春想い 互酬
早朝の母の雪かき通学路 寿歩
ごうごうと天に高鳴る春嵐 夢心

(投句)

草青み銀山の町移住増え 小牧
草青み命はじける時迎え 徹心
あたたかや母はランチを所望せり 玄鳥
五粒ずつラップで包み豆撒きぬ 夢心
下見かねはしごのランチ春の風 寿歩
庭の梅年を重ねてちらほらと 小牧
草青み命の輪廻ありがたし 徹心
隣人の消息を知る春の畑 玄鳥
散歩途次下萌え写生を楽しみぬ 徹心
デパ地下の春の香りに包まれて 互酬
秀句二つメンバーからのお年玉 小牧

『句会後記』

列島が冷氣に包まれている中、全員元気に出席し玄鳥さんの司会の下開催されました。今回は、思わずクスツとする句や暖かみのある句が多かったように思います。春めいてきた陽光が心をほぐし、無意識ながら作句に影響を与えたのでしようか。一句ずつの鑑賞で、私の選句理由が詠み手の意図と随分と違っていることがわかりましたが、それも俳句の面白みといたしました。三月の総会で『交譲葉』の紹介を宮内さんがしてくださいとのこと。とても気楽な会で脳トレにもなります。皆様のご加入を心よりお待ちしております。

(寿歩記)